

研究課題名 オリンピックが目指す「平和」への価値とその方向性ーカントの平和思想を手掛かりにー
研究代表者 野上 玲子

オリンピックの活動は、クーベルタンの思想に基づく平和への寄与を使命とし、その思想は「オリンピズムの根本原則」によって継承されている。その一方で、オリンピックから生じたテロ事件やボイコット問題は、オリンピックの平和思想を揺るがす批判的要素として捉えられている。当時、クーベルタンがオリンピックの復興を切望した背景に、平和な社会の確立という考えがあったことから、どの先行研究においても、オリンピズムの説明の中に平和への「寄与」、「貢献」、「希求」が言及されている。しかし、「平和への寄与」や「平和への貢献」という際の、「平和」とは何を意味し、どのような行為を意味しているのかという点への言及は見られない。依然として、オリンピズムが目指す平和とは何か不明瞭であるとの問題が残されている。「平和への寄与」の「平和」に内在する思想を把握することではじめて、この行為自体の妥当性や問題性についての哲学的考察が可能となるだろう。そこで本研究では、まずオリンピズムに関する先行研究とクーベルタンの思想を整理した。そして、ドイツの哲学者イマヌエル・カントの平和思想を援用し、オリンピズムにおける平和への寄与とは、具体的にどのような行為を示すのかについて検討した。その結果、カントは、永遠平和を保証しているのは「自然」であると考え、自然が先導する人間の行為は、「競争」を通じて進化し、解決され、相互理解を生み出す平和へと前進していくと考えるのである。さらにカントは、自然の意図が導く私たちの世界は、常に歴史と関連し、「歴史考察」をすることによって、未来への展望が持てるのである。クーベルタンとカントの平和思想を整理し、さらにカントの人間学的な視点から「自然や人間の本质」との関連を考察した結果、オリンピックおよびオリンピズムにおける「平和に寄与する」とは、「競争」と「歴史考察」を基盤とした行為であり、この両者を実践することによって、積極的平和へとつながる可能性が期待できるのである。